In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

| | |
|---|---|
| Title | 近代沖縄のある知識人像 ： 陰陽師・吉浜智改の世界 |
| Author | 三浦, 國雄 |
| Citation | 人文研究. 53 巻 8 号, p.1-13. |
| Issue Date | 2001-12 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学大学院文学研究科 |
| Description | |

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第53巻　第8分冊　2001年1頁～13頁

# 近代沖縄のある知識人像
## ― 陰陽師・吉浜智改の世界 ―

三浦國雄

### 1．前言

近年沖縄では，各地で家文書の発見が相次いでいる。私は易占，暦，風水などのいわゆる術数書を中心に何度も現地に足を運んで調べているが，特に私の関心を引いているのがサンジンソーの蔵書である。サンジンソーとは「三世相」の沖縄訛りで，易者を意味する沖縄独特の呼称である。元来，「三世相」は仏教語で，占術家がこれを，過去，現在，未来の三世の因果応報ならぬ吉凶禍福を言い当てるという意味に転用したものであって，宋代にはすでに『演禽斗数三世相書』という名の占術の書が刊行されている。わが江戸時代にも「三世相書」は，『万暦雑書三世相』『三世相大観』などという名の下に広く流布した。ただ，沖縄の「サンジンソー」がヤマトと中国のいずれの「三世相」に由来するのかよく分からない。

ここで篇末の表を見ていただきたい。ここに掲げたのは，私が調べたサンジンソーたちの蔵書である。尤も，これらは網羅的ではないし，また，④の上江洲家と⑤の与世永家はサンジンソーの家系ではない。

①の喜友名盛芳氏は首里の士族出身で，明治12年，琉球王朝が滅亡すると今帰仁（なきじん）の山中に隠棲し，サンジンソーを生業として終生世に出ようとはしなかった人である。②の金良宗邦氏も，首里出身の母方の祖父から易を学んでいる。金良氏の蔵書の中には，漢籍の他に近代の哲学書や宗教書，それに心理学の本も含まれている。⑥の宮城仁収氏は③の吉浜智改氏の弟子筋に当たる人で，数年前に物故されたが，最近その蔵書やノート類――といってもそんなに数は多くない――が久米島の自然文化センターに寄託されてようやく調査が始まったばかりである。

このような限られた人々を以て沖縄のサンジンソーを代表させるのはかなり強引だとは思うが，私の知見は今のところ彼らの範囲を出ないので，ここから試みに幾つか共通項を引き出してみよう。

1．ユタなどとは違い，霊的直感よりも書物から得た占断法によって運勢を看る（地方によっては「サンジンソー」を「書物」の訛りである「シムチ」と呼ぶところもある）。ただ，サンジンソーの中にも霊感の強い人もいることはいて，霊能者と截然と分けられない部分もある。

2．そういうわけで，原則的には拠り所はカミではなく，主として中国の典籍である。

3．ここに掲げたサンジンソーたち（吉浜家の場合は吉浜智改氏）には，儒学をはじめ中国文化に対する素養があり，漢文もある程度読めたと考えられる。

4．その占法は，易占を主としながらいわゆる五術（山・医・命・卜・相）兼修への志向が強い。

5．その易占であるが，筮竹を操作してテクスト（『易経』）から特定の占断辞を抽き出す正統的占法ではなく，近世の東アジアで広く行われていた断易（五行易）であった。

6．易占のほかに彼らが共有していたのが風水であった。沖縄では，風水鑑定の有力な担い手がサンジンソーであった。

7．日選びも彼らの重要な営為であった。上江洲家と与世永家に王府刊行の『選日通書』が伝えられているのは，この両家の家格が高いからであった。

小論で私が取り上げるのは，他ならぬ表③の吉浜智改という人物である。この人は実に異色なサンジンソーで，智改氏自身，サンジンソーという呼び名を嫌っただけでなく，いわゆるサンジンソーの枠内に収まり切らない，スケールの大きな人物であった。

篇末に付した略年譜を見ていただきたい。まず，智改氏が生を享け，生涯の大半を過ごし，また，郷土史家としてずっと拘り続けた，久米島という島に注目したい。沖縄の離島はそれぞれに個性的であるが，那覇から飛行機で約半時間，フェリーで約４時間の近くに位置する久米島は，かつては中国との交易の中継地として独特の歴史と文化を育んできた。今でも具志川グスクなどの城跡に行くと，交易船によって運ばれてきた，龍泉窯などの陶器片がたくさん採取できる。

吉浜家は，この久米島で代々地頭代を務めてきた久米島きっての名家，上江洲家と繋がっている（表④の上江洲家である）。

智改氏は若い頃，憲兵として朝鮮半島に赴いているが，後述するように，この朝鮮体験は智改氏のその後の人生を決定づけるほどの重要な意味をもっていたのではないか，と私は考えている。

朝鮮から帰国するや，大正８年，35歳の時に「陰陽師・吉浜黒龍」の名で「運命予言」のチラシを作成している。易占家・吉浜智改の第一歩であった。

その後，智改氏は，その識見と徳望によって織物同業組合長，航路組合長などに推されただけでなく，昭和７年から４年間，具志川村村長の要職にあった。

そして，かの運命の昭和20年を迎える。この時智改氏61歳。具志川村農業会長の任にあった。この年６月，米軍がイーフ・ビーチという久米島の名勝から無血上陸を果たし，これを境に久米島の人々の暮らしは激変することになる。この時，米軍将校が軍医と通訳を連れて智改氏を訪問し，島の治安維持に協力を要請するという一幕もあった。

この昭和20年時の久米島の様相については，智改氏が貴重な日記を残している。この『乙酉年日記』は，仲間智秀氏によって重要な資料として活用され，「久米島の戦争記」としてまとめられて，岩波の『世界』1971年６月号に発表された。

戦後，氏は易学に没頭するかたわら，沖縄や久米島の歴史や習俗に関する該博な知識を自在に駆使して，おびただしい割記風のノートを残した。

智改氏にはまた，文人としての一面もあり，琉歌（8・8・8・6の４句30音からなる定型の歌）をよくしただけでなく，朝鮮の有名なパンソリ『春香伝』を沖縄芝居に翻案した『獄中の花』という作品も残している。

以下，占術を中心にしつつ，さらに信仰，沖縄，朝鮮へと視点を拡大して，いささか氏の内面に踏み込んでみたい。

## 2．占術観

先に述べたように，易占家としての智改氏が世に出たのは，朝鮮での事業に失敗し，妻子を伴って帰国した大正８年，35歳の時で，この年智改氏は前述したように「運命予言」というチラシを作成している。このチラシは，智改氏の占術観だけでなく，氏の人生観，世界観を考える上で大変貴重な資料だと思う。

まず氏が，自分のことを「陰陽師・吉浜黒龍」と称していることに留意したい。氏は晩年に至るまで「陰陽師」ないし「陰陽家」と自称し，決して「サンジンソー」とは呼ばなかった。氏から見ると，「サンジンソー」は「ユタ」とともに「迷信」を振りまいて社会に害を与える忌むべき存在であり，このチラシの中だけでなく氏は一貫して彼らを攻撃している。

さて，氏はこのチラシの中で，天地の間の森羅万象から説き起こし，これを「化学上」から「原素」に還元すると「七十」にすぎざるも，「更らにこれを約言すれば木火土金水の五行」に収斂しうると言い，この五行説は「支那及び日本に限らず，西欧諸国」においても唱道されているとして，五行説の普遍性を力強く主張する。その上に立って，五行の相生・相克に基づく四柱推命は，「天地自然の理数に暗合する者と謂はざるべからず」と論理を展開させてゆく。

次に「陰陽師」として立つに至った自己の経歴 について触れ，「斯学の源泉地たる満鮮地方を歴遊」して実地に研鑽を積んだだけでなく，「機会を捉うる毎に原書を蒐集してこれを飜読」して今日に及んだが，その間実に９年の歳月を閲し，この度の帰国を機に「県下における同胞各位の推命依頼に応ぜんとす」るに至ったという。

次に文章は一転してユタ（巫女）攻撃に移り，沖縄県下に「迷信者」が多く，「占筮の一部だに辨へざる彼の巫女の言に惑溺」し，「身分不相応の祭祀祈祷を敢てし」て家産を破るに至る人があるのは，「迷信の因襲久しきに由」ると憤慨し，「巫女」の「荒唐茫昧」な祖先祭祀に，「真正の哲理」，すなわち陰陽五行説を対置する。そして自分がこの「推命」，つまり四柱推命を施

そうとするのは「胸奥を衒」ったり，金もうけをしたいがためでなく，これこそ自分の「天職」だと悟って「世を済う一助」としたいがためであり，「生命を斯学に捧げんとの微表に出でたる」故なのだと，格調高く文章を結んでいる。

この「四柱推命」を「斯学」と呼ぶ智改氏の立場は，「推命」を頂点に置き，その底辺に「科学」と「巫女」とを並べた二等辺三角形を描くと分かりやすいかと思う。まず，「推命」は断じ

て「迷信」ではなく，「巫女」こそ「迷信」であるとして，「迷信」を「巫女」の側に押し付けることで「推命」を「迷信」攻撃から守っている。では，「推命」は「科学」かというと実はそうではない。智改氏は「推命」と「科学」との整合性を説くかに見えて，陰陽五行説を内包する「推命」を「科学」の上位に位置づけようとしたのではないだろうか。氏にとって「推命」は「科学」を超えたさらに奥深い「真正なる哲理」なのである。「科学」にすり寄って「科学性」を説くことで占術の地位を上げようとする，今日でもよく使われる論理（たとえば「風水の科学的合理性」）とは別種の論理がここには認められるように思う。

智改氏の占術観はこのようにチラシの中に表明されていて，その枠組みは生涯ほとんど変わらなかったと考えられるが，具体的な占法となると，後述するように変化した痕跡が認められる。

智改氏がこのチラシを書くことによっていわゆる「陰陽家」として世に出た時，その占術はいま見たように主として算命，つまり四柱推命であった。この広告によると，ほかに「家相風水」も見たようであるが，「注意」事項の中に依頼人は「生年月日時間」を示されたしとあるから，やはり四柱推命が主たる占術であった。ただ，それ以外にも「沖縄のサンジンソーと術数書」の智改文書の欄を見ていただければ分かるように，氏は多彩な占法に関心を抱いていた。他に，ここには掲げていない占術書も少なからずある。百本のくじ，つまり御神籤に使うヒャクバンクジ（百番籤）も持っておられた。①の喜友名盛芳氏や②の金良宗邦氏らと比べてみると，その関心の広さがよく分かる。いわゆる五術をすべてカバーしているのである。

この広い関心を時間の相で見てみると，顕著な変化をひとつ指摘できる。すなわち主たる占法の，四柱推命から易占への変化である。終戦後間もない頃に書かれたと思われる智改氏の研

究ノートの中に，「六十二年初メテ易ノ初歩ニ識接ス」という書き付けが見られる。「六十二年」というのは62歳，つまり終戦直後の昭和21年（1946）のことである。事実，現在伝えられている智改文書に依るかぎり，戦前に智改氏と易とのつながりを示す資料は見あたらず，終戦を境に易関係のノート類が目立って多くなり，少なからざる実占メモ（「実例記」）も現れてくる。なお，ここでいう「易」は初めにも述べたように『周易』という経典に基づいて占う正統的な易占ではなく，「断易」というまったく別種の易占である。このシステムはかなり複雑であってここでその全容の説明はできないのであるが，要するに，占った月と日と，易の爻との強弱関係を五行相生・相克の観点から見て占断する方法で，易の卦爻はそのまま使うが，易のテキストは全然使わない。近世の東アジアで一般に普及していた易占は，どうもこの断易＝五行易であったらしいことは沖縄に残されている文書類から逆に推測しうるのである。先の術数書の表中，上江洲・与世永家文書中にも，当主やあるいは当主に依頼された易者たちが行った断易による占例メモがたくさん残されている。

ところで，この「沖縄のサンジンソーとその術数書」を見てもらえば分かるように，これらのサンジンソーたちは必ず日選びも行っている。いわゆる日取りは彼らの大切な仕事のひとつであった。智改氏の場合も，中国の代表的な通俗的日選びの書である『玉匣記』を所蔵し，それを活用した痕跡があるし，琉球暦だけでなく，民国の暦書も持っておられた。易者としては当然のことながら，智改氏は日に吉凶があることを戦後の日記や研究ノートの中で繰り返し主張している。

暦に対する関心は，現存の文書資料に徴する限り戦前から持っていたようで，中国製の民国12，13，20年（大正12，13，昭和６）版の『民国時憲書』のほか，日本製の大正15，昭和６，９，11，15年の『略本暦』という名の暦書が残されている。暦書は算命のデータを割り出す上でも必要なものであった。

しかし，智改氏の暦に対する本格的研究は戦後からのようで，米軍が上陸してきた昭和20年，山中に避難していた時，暦がなくて困った体験が動機になったらしい。実際，このあと，『丙戌年九紫家庭行事択日一覧表』という簡便な暦を作ってガリ版で頒布している。また，昭和21年以降，毎年のようにいわゆる具注暦の体裁を取った暦を自分で作成しており，そこに鉛筆などでその日の生活メモのようなものが書き込まれていて，おのずから智改氏の伝記資料にもなっている。そして，これらの自撰暦のタイトルに，たとえば『庚寅五黄年陰陽暦』などと「五黄」という九星術のタームが入っていることから察せられるように，戦後智改氏は，断易とともに九星による占断を盛んに行っている。これは日選びの延長と考えてよかろう。

## ３．運命と信仰

次に信仰の問題に移りたい。

吉浜智改氏の精神世界を考える場合，占術とても宗教，信仰の問題を避けて通ることはできない。このふたつは，どこかで通じているのではあるまいか。

戦後に書かれた智改氏のエッセイには，宗教や信仰に関する言及が多く，しばしば，沖縄の信仰は結局，祖先崇拝に帰着するとして，これを「祖先宗」と呼んだりしており，位牌についても好んで自説を展開している。智改氏自身の信仰の基底にあるのも祖先崇拝だったと思われる。

しかし一方で氏は，「祖先崇拝は宗教として発達していない。それはキリスト教のように天神を祀り上げる宗教とは別物であって，宗教なき沖縄から宗教国沖縄へと作り変えていかねばならぬ」と主張する（『通俗講話』）。終戦翌年の日記に，「民衆を墓の浄土から神仏へ転向せしめよ」と書き，久米島の人々は原始生活の域を脱しておらず，無宗教，無信仰生活を続けている，と述べるのもその意味であろう。智改氏は，祖先神ではない絶対的なカミを立てる宗教を，人間や国家にとってなくてはならぬ良きものと考えていたふしがある。「今沖縄に於ける住民の生活現状を看るに，科学生活をなしている人が何人ゐるであらうか，更らに信仰生活をなしてゐる人も多く見当らない」（迷信論）などと，「信仰」と「科学」とを理想的なあり方として同格に並べるのも，おそらく進駐してきた米軍の影響ではあろうが，「信仰」なるものへの氏の希求をよく表している。

智改氏は，略年譜にも記しておいたように，晩年の昭和27年（1952），68歳の時，病を得て易道の実践かたがた糸満にて静養するのであるが，この頃から生長の家に傾倒し，糸満での集会で法話を講じるまでになった。智改文書の中には，そのとき行った法話の原稿が10篇ほど残されている。また他に，『御経本』と名付けられたられたノートがある。ここには，『阿弥陀経』『般若心経』『観音経』，それに『高王白衣観音経』が書写されているほか，生長の家の教義メモが断片的に記されている。また，毎日一定時に供物灯を捧げ，『甘露の法雨』『般若心経』『高王白衣観音経』を唱えるとして，智改氏の祖父母，父母，それに早逝した長男の命日がメモされている。この『甘露の法雨』というのは，「聖経」とも呼ばれる生長の家の根本経典のようである。

私は生長の家の教義についてほとんど無知なのであるが，この『甘露の法雨』に限っていえば，神道，仏教，キリスト教を折衷しており，まず宇宙に，全能なる創造主にしてあらゆるところに遍在し，一切のものの実質である「神」を設定したあと，物質としての人間の肉体の奥に，霊妙きわまりなき完全な存在があるとして，これを「生命」と呼び「心」と呼び，また「神」に造られたままの完全なる「汝そのもの」だとし，その「実相」を自覚せよと迫って，病も死も罪も煩悩も虚妄でしかない，と説く。

晩年の智改氏が易道を究める一方で，こうした教義を持つ生長の家に傾倒していった心の軌跡に関して，私はまだ何も摑んではいない。ただ，智改氏はもともと仏教に関心は持っていたようだし，祖先崇拝だけの沖縄の宗教を超越的な神を戴く真の宗教へ発展させたいと願ってい

た氏にとって，生長の家の教義は深く心に響くところがあったのかもしれない。また，宇宙の「大生命」としての神を「祖神（おやがみ）」と呼ぶ生長の家の神観念は，氏には祖先崇拝を拡大させたものと映って入り易かったのかもしれない。

ここで少し視点を変えてみたい。智改氏の中で易道と信仰とがどのように繋がっていたのか，という問題である。言い換えれば，易者の信仰という問題である。易学は氏にとってまず職業であっただろうが，それだけでなく先に「運命預言」のチラシで確かめたように，氏の世界観，人生観とも深く関わっていた。両者を繋ぐものが「運命」というものではなっかただろうか。智改氏のノートに「人は皆呱々の声とともに運命の宣告せられてあり」（「身旺論」）という書き付けがある。冥々たる運命を計り知る術が推命であり易占であり，時にはそれによって神意を伺いうる。しかしたとえば，占術によって自分の死期を知り得たとしても，必ずしも心の平安が得られるわけではない。晩年の智改氏は，冥々たる運命の向こうに神の摂理を感じ取り，それに我が身を委ねることで安心立命を得ようとしたのではないだろうか。

先に智改氏の占術観を三角形の図として表示したが，晩年の智改氏に即して書き換えるなら，下のような図になるのではないだろうか。

## 4．拠り所としての沖縄

智改氏は自己のアイデンティティのようなものをどこに求めていたのか。戦前の数少ない資料からはその答えを見いだすことは難しい。ところが，戦争を境に氏の姿勢は明確になってくる。戦後になって智改氏が残したノート類が急激に増加するという事情を考慮する必要はあるものの，戦争を契機に沖縄に関する言説が目立って多くなってくるのは否定のしようがない。

まず，米軍が上陸してきた1945年に，久米島で何が起こったかを丹念に記録した智改氏の戦時中の日記を取り上げたい。これについては初めにも紹介したが，アイデンティティという観点から看てみると，氏の拠り所は，日本→沖縄→久米島へと収斂していっているように思われる。米軍将校が通訳を伴って智改氏宅を訪問し，村の治安維持への協力を要請したことは先述

したが，この時，その申し出を断った理由として，自分は「いやしくも日本軍人として明治，大正，昭和の三代に事え」た身だから，突然変節して時の権力の言いなりになるのは良心が許さない，と日記（『乙酉年日記』）に記している。

しかし，9月15日付けの文章になるとニュアンスがかなり違う。「日本人は何故敗戦したか」「日本人は何故天誅を受けしや」などと問いを立てて自分なりの分析を行っているのであるが，その突き放した口吻から「日本人」と自分との間にかなり距離を置いているような印象を受けるのに対して，沖縄と郷土久米島を語る時には非常に熱いものが感じられる。戦時中の日記（『乙酉年日記』）に次のような書き付けが残されている。ここで氏は「沖縄民族」という語を使い，「民族自存」のために久米島だけでも無抵抗を貫いて生き延びねばならぬと説いている。

1．沖縄民族は南方を初め戦禍の犠牲甚大にして，沖縄本島迄が玉砕全滅せば民族の滅亡火を見るより明らかである。斯くなれば久米島だけでも多く生き残すといふことは民族自存の為め最善の策である。

2．防備なき島民が玉砕すればとて戦は勝つのでもなく，むしろ意義なき殺生をなしたることになり（神）之れを喜ばせ給はず。

以上，後日の為記す。

戦後の智改氏の，沖縄と郷土に対する旺盛な関心の原点はここにあるように思われる。氏の関心には，現在と未来および過去との三方向があるが，現在と未来とは一つに括れるから，結局二つに収斂できよう。現在と未来の方向は，どちらかといえば政治的，時局的関心であり，後者は，歴史や習俗に対する関心と，一応分けることができるけれども，これらは別々のものではなく，自分が拠って立つ基盤としての沖縄と久米島とのあるべき姿は何か，という共通の根から発している。前者についていま一点だけ紹介しておくと，アメリカ統治下での復帰運動を，沖縄の現実を知らざる東京在住の沖縄人の空論として批判しているが，ここには智改氏らしさがよく出ているように思う（「おぼえ書」）。

後者については比較的多くのノートが残されていて，沖縄と久米島の歴史，固有の伝統的な風習，年中行事などについて考証と解説が加えられており，それらを保存し今に生かす道が求められている。小論では紙幅の関係上，『和漢琉西年号表　祖先を尋ねて　一九四六年晩秋』と表紙に墨書されたノートだけを紹介しておく。『年号表』の方は文治3年（1187）から1954年に至る手製の歴史年表であるが，記事は沖縄，特に久米島のことが中心になっている。ところが1900年代に入ると，智改氏自身の記事が増え，さながら智改年譜の様相を呈してくる。つまり，沖縄と久米島の近代史の上に智改氏の個人史が重ねられてゆくのである。戦前，具志川村村長や各種組合長の要職にあった智改氏は，歴史の潮流の中に，歴史という舞台の一登場人物として自己を投げ入れ，客体化しようとしたのかもしれない。後半の『祖先を尋ねて』は，久米島の風物に関する随想風の考察になっている。ここに現れているのは，智改氏の歴史好きや郷土愛というようなことではない。氏のアイデンティフィケーションへの熾烈な欲求はそうし

た趣味の域を超えているように思われる。氏のいう「祖先」は吉浜家の祖先というような狭い意味ではなく，すべての沖縄人，久米島人のルーツという意味を包み込んでいるのである。

## 5．朝鮮体験

戦後を中心に，精神生活も含めた吉浜智改氏の生涯をざっと見てきたわけであるが，最後に氏にとっての朝鮮体験の持つ意味を考えておきたい。結論を先に言っておけば，智改氏の人間形成にとって朝鮮は決定的な意味を持っていて，あたかもそれは母胎のごときものだったのではないだろうか。氏は終世「鶏林」（朝鮮の雅称）と号し，自分の研究ノートにしばしばハングルで「요시하이얍이마」と書き，朝鮮語にも堪能であったという。

略年譜の示す通り，23歳から29歳に至る，青春の重要な一時期を朝鮮で過ごしただけでなく，30歳を過ぎてからも，更に40歳以降も，たびたび渡鮮している。氏が朝鮮で見たもの，行ったことが何であったか，今となっては不明なところが多いのであるが，はっきりしていることの一つは，中国哲学や占術に対する興趣の眼を朝鮮半島で開かれたという事実である。例の戦争日記には，昭和元年，自分は朝鮮の平安北道にいて，当時72歳であった季訓長という盲目の占術家を易経の師と仰いで陰陽學を学んでいた，と記され，さらに，この老翁から「昭和」の「昭」は「照」の下の４つの点のない文字だから，この時代に国主は手足（植民地）をもぎ取られ国民を失うであろう，という予言を聞かされたと書かれている。また，氏の蔵書の中には『麻衣相法』という人相術の古典が含まれているが，この表紙には「女神（ママ）国領亀邑全士課翁蔵書伝授」と墨書されており，智改氏が朝鮮で全士課なる人物から授けられた可能性もある。

この時，一緒に学んでいたのが，東亜同文書院を出て医術に長じていた岡田多平という人物であった。晩年智改氏は，生長の家の信仰を通じてこの岡田氏と再会を果たし，信仰の先導者として篤い信頼を寄せるのである。

また，ある晩年のノートによれば，憲兵時代，平安北道のある寺から出た仏像を朝鮮人から譲り受けて奉祀していたところ，それを見た京城日報の記者から『般若心経』をあげなさいと言われたという（『御経本』）。

また，前引『和漢琉西年号表』には，いくつかの朝鮮と琉球間の交渉記事が記されており，『祖先を尋ねて』の中にも，朝鮮語音と琉球語音との類似を指摘した箇所がある。また，朝鮮に亡命した琉球の温沙道（？－1398）は領主を意味する朝鮮語の御使道（オーサート）に近いとか，首里の婦人の袴や久米島の神女の服装は朝鮮に似たものがある，などと述べ，朝鮮語や朝鮮文化の知識を活用して琉球史の再解釈を試みている。

さらにまた，戦後の1951年に書かれたあるノートには，自分は明治41年の「朝鮮合併」の時に朝鮮にいたので亡国の民の悲哀がよく分かるが，今まさにその悲哀を見せつけられている，と記されている。

戦前から久米島で一人の朝鮮人が沖縄出身の女性と一緒に貧しい暮らしを営んでいた。どういう事情でどこから来たのか，今もってよく分からないところがあるらしいのだが，1945年，米軍が久米島に上陸してきた時，山に逃げてゲリラ化していた日本兵によってアメリカと通じたという嫌疑を掛けられ，12歳を頭に５人の子供共々この朝鮮人一家計７人が殺害されるという事態が発生した。この事件は，のちに沖縄では広く知られるようになるのであるが，智改氏は例の『乙酉年日記』の中で，「史上永遠に残る皇軍の汚名」だと吐き捨てるように記している。これだけはっきり言い切れるところに，朝鮮に寄せる智改氏の並々ならぬ思いを感じ取ることができよう。

前述したパンソリの翻案も，そうした熱き思いがなければ出来なかったであろう。智改氏は『春香伝』を『獄中の花』と改名しているが，これには根拠がある。『獄中の花』というのは，朝鮮開化期の小説家，李海潮（イヘジョ）（1869－1927）が『春香伝』を改作した新小説のタイトルなのである（野崎充彦氏の教示による）。智改氏はこの小説のこともよく知っていたことになる。

智改氏は1951年に書かれたあるノートの中で，戦後私は将来の沖縄のために以下の３点を叫び続けてきたと書いている。

1．沖縄人は語学を学ぶべし。

2．沖縄人は国際精神（国際的礼儀，道徳，宗教）を学ぶべし。

3．沖縄人は教育即生活を学ぶべし。

こういうところにも，若い時の朝鮮体験が息づいているように思われる。

## 6．結　語

この吉浜智改という人物を一語で表すとすれば，どのような語が適切であろうか。

たしかに氏は村長をはじめ各種の組合長を歴任し，戦時中も米軍将校の訪問を受け，戦後公職から退いたあとも「中老会」という老人クラブを組織するなど，村の指導者的立場にあった。かといって氏を行政家やオピニオンリーダーとして位置づけるのも一面的である。

村長などが表の顔とすると，占術家としての智改氏は裏の顔といえるかもしれない。しかし，行政家であると同時にプロの占術家というのも，そうざらにある話ではない。それに占術家としても，前述のごとくユタはいうに及ばず，いわゆるサンジンソーとは一線を画している。漢学の素養と見識に基づくプライドがそうさせたのであろう。その上，文人的な一面も無視することはできない。

私はこのような存在をとりあえず「知識人」という語で受け止めておいたのであるが，知識人としても氏の風格は特異である。結局，氏の出現の意味は氏の個性に帰すしかないでのであろうか。しかし，氏は何もないところから突然変異的に現れたと考えるのも非現実的である。

まず，中国との交流において重要な役割を果たした久米島という場の個性を考慮に入れる必

要があろう。初めに紹介したように，この小さな島の文化的蓄積は決して侮れるものではない。そして次に，家系の問題がある。吉浜家は，代々地頭代を勤めた上江洲家という久米島きっての旧家と姻戚関係にあった。目下，上江洲家から出た数千点に及ぶ家文書の解読が進められているが，上江洲家の当主は代々易占をよくし，上江洲家文書にはプロの易者に依頼したもののほかに，当主自身が行った易占のメモが少なからず残されている。当の智改氏の祖父智栄氏の実占メモもある。なお，これらは殆どすべて断易である。

このような歴史的背景を踏まえると，行政家でもあり易占家でもあった智改氏の出現は，決して突然変異的なものではなかったことが理解されよう。ある意味では，久米島から出るべくして出た人と言いうるのである。晩年の智改氏の，郷土久米島への熱烈な関心はその意味では暗示的である。智改氏は，自己の真正なる先祖への帰還を果たそうとしたのかもしれない。

歴史的背景といえば，時代の変化というもうひとつの要因を考慮に入れる必要がある。1879年（明治12年），琉球藩が廃せられて沖縄県が置かれた。これを境にリストラされた士族の没落が始まる。智改氏は前引『祖先を尋ねて』の1891年（明治24年，この年智改氏，７歳）の条に次のように記している。

> 首里那覇ノ士族ニシテ職ヲ求メ田舎ノ教師ニ流レ込ム者アリ各地寺子屋ニテ読書教育ガ盛ンニナッタ。

仕事を奪われた士族たちにとっては迷惑だったであろうが，文化は士族から庶民へ，首里から地方へと伝播され拡散されてゆく。むろん，以前から地方（じかた）役人が首里・那覇の都市文化を熱心に受容してはいたが，ここによりドラスティックな知の拡散と下降現象が起きたと考えられる。智改氏がこの頃に生を享けたというのも暗示的である。その頃，久米島にも首里・那覇の儒教・漢学を中心とした士族文化がかなりの勢いで流れ込んできていたはずである。沖縄本島北谷町のサンジンソー金良宗邦氏（表の②参照）は，たとえば『周易折中』の清刊本を所蔵しておられ，そこに氏自身の手による書き入れもあるのであるが，前述のように金良氏の母方の祖父は首里出身で漢学の素養があって，やはりサンジンソーをしていたという。

ところが興味深いことに，智改氏より一世代あとの易者——表にある⑥の宮城仁収氏などになると，その蔵書から漢籍が姿を消すようになる。宮城氏は近年亡くなったサンジンソーで，智改氏から教えを受けた人物である。また，今年（2001）の３月に世を去った宮古島のある易者の蔵書を調べたところ，この人の拠って立つ基盤はもっぱら高島易断であり，例の『神宮館運勢暦』が昭和34年版から平成12年版まで全部そろってきれいに保存されていた。智改氏や金良氏の世代の後あたりから，漢学ばなれというまた別の知の変化が起きていたと考えられる。

智改氏に戻っていえば，私は氏のような「知識人」が出現した基盤を沖縄と久米島の文化的蓄積と歴史的変化の中に求めたのであるが，このような，一方で行政に携わりつつ一方で易者として民衆の傍近くまで降りてきた「知識人」は，ある限られた時代の沖縄に固有の存在なのか，それとも他の東アジア地域でも見られるのか，今後，枠をさらに拡げて考察する必要があろう。

## 吉浜智改（1885－1956）略年譜

| | | |
|---|---|---|
| 1885年（明治18，1歳） | 9月2日 | 久米島具志川村にて出生。 |
| 1905年（明治38，21歳） | 12月1日 | 徴兵にて小倉歩兵第14連隊補充大隊に入営。 |
| 1907年（明治40，23歳） | 12月1日 | 憲兵上等兵として朝鮮駐箚憲兵隊へ編入。 |
| | 12月8日 | 門司港出港。 |
| | 12月10日 | 仁川港上陸。 |
| 1910年（明治43，26歳） | 12月1日 | 陸軍憲兵伍長に任ぜらる。 |
| 1913年（大正2，29歳） | 11月8日 | 陸軍軍曹。 |
| | 11月30日 | 現役満期。 |
| | 12月1日 | 朝鮮より帰国，後備役編入。 |
| 1914年（大正3，30歳） | | 長男寅夫誕生。 |
| 1916年（大正5，32歳） | | 再度朝鮮に渡り，鉱業に従事。この頃，岡田多平氏に出会ったか。 |
| 1918年（大正7，34歳） | | 次男龍夫，平安北道亀城にて出生。 |
| 1919年（大正8，35歳） | | 事業に失敗して妻子を伴い朝鮮より帰国。「陰陽師　吉浜黒龍」の名で「運命予言」のチラシを配る。 |
| 1920年（大正9，36歳） | | 織物組合設立され，初代組合長となる。 |
| 1924年（大正13，40歳） | | 航路組合長となる。 |
| 1926年（大正15，昭和元，42歳） | | この頃，しばしば渡鮮。 |
| 1932年（昭和7，48歳） | | 具志川村村長に就任（1936年まで）。 |
| 1942年（昭和17，58歳） | | 久米島産業組合長となる。 |
| 1944年（昭和19，60歳） | | 具志川村農業会長となる。 |
| 1945年（昭和20，61歳） | 6月26日 | 米軍，久米島のイーフ・ビーチへ無血上陸。 |
| | 7月17日 | 米軍将校，智改氏を訪問し，村の治安維持に協力を求む。この年，初めて自分で暦を作成。 |
| 1946年（昭和21，62歳） | | 「62年初メテ易ノ初歩ニ識接ス」と記す（『易書翻訳ノート』）。 |
| 1948年（昭和23，64歳） | | 中老会設立。長男寅夫病没。 |
| 1951年（昭和26，67歳） | | 病気治療のため那覇安里にて1年暮らす。 |
| 1952年（昭和27，68歳） | | この年より静養を兼ねて糸満に仮寓，易学を実習。 |
| 1954年（昭和29，70歳） | | 糸満で遺言を書く。 |
| 1955年（昭和30，71歳） | | 『御経本』書写。生長の家の法話案文多数書く。 |
| 1956年（昭和31，72歳） | | 逝去。 |

## 沖縄のサンジンソーとその蔵書

| | ①喜友名盛芳文書（首里～名護） | ②金良宗邦文書（北谷町） | ③吉浜智改文書（久米島） | ④上江洲家文書（久米島） | ⑤与世永家文書（久米島） | ⑥宮城仁収文書（久米島） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 山（風水） | 門開家向風水秘伝（写本） | 地理大全<br>羅盤 | 宅墓二十四山分金<br>鉛弾子<br>紙羅盤（写本） | 家記 | 堪輿秘旨<br>平陽全書（断簡） | 洛地準則詳解（和書） |
| 医 | 灸法（写本） | | 御膳本草<br>灸法<br>達生篇（写本） | 疱瘡伝<br>衛生便覧 | 医方集解<br>疱瘡経験全書 | |
| 命 | | | 推命秘録<br>四柱推命 | | | |
| 卜 | 易学小筌<br>増刪卜易（写本） | 増刪卜易<br>五行易指南 | 断易大全<br>卜筮正宗 | 多数の実占例のメモ | 実占例のメモ | 周易活断<br>易典（和書） |
| 相 | | | 麻衣相法 | | | 手相と運命の神秘(和書) |
| 雑占 | 姓名学大家宗内章編（写本） | 観音霊籤 | 留侯秘書<br>霊籤（琉球語） | 百番籤 | | |
| 暦書 | 選択日必鑑（写本） | 万暦集（写本）<br>通書万万集(写本) | 民国暦通書<br>琉球暦(亀島如玉) | 大清××年選日通書（7種） | 同治五年選日通書<br>光緒五年選日通書 | 日撰鑑（ノート） |
| 玉匣記等 | 写本 | 写本2冊(石敢当図等増補) | 石印本 | 刊本(石敢当図等増補) | 万宝全書（刊本） | |
| 儒書 | | 周易折中<br>四書体註 | 白鹿洞学規集註<br>童蒙須知 | 四書体註<br>小学体註<br>四本堂家礼<br>孟子集註俚諺抄 | 四書集註<br>四書体註<br>朱子家礼<br>孔子家語 | |
| その他 | 英単語帳<br>備忘録 | | 易学，郷土誌，随想，創作の各種ノート，仏教関係書 | 家譜，護符，農業全書，拾玉智恵海，山林真秘，土地文書 | 万宝大雑書，節用集，土地文書 | 交霊祈祷術(和書)，墓中符草稿，<br>祭文，雑記帳 |